



朝のこない夜はない


ほんもの じんかく  
本物の人格は  
ちようせん くる  
挑戦と苦しみの経験から

副山首 鈴木正修

中国・宋の時代の詩人、謝枋得の詩の中に、「雪中の松柏いよいよ青青」という言葉があります。

春や夏、他の落葉樹も青々としている季節には、松などの常緑樹は目立ちません。しかし、冬になり他の木々の葉が散ったあと、雪の中でもその青さを保っている松は、ひとときわ人の目を引きつけます。

人間も同じです。困難や苦しいことに直面したとき、その人の本当の姿や人柄、力量というものが現われてくるのです。



今回は、書物を読んで仕事をする学者にとって絶望的な目の障害がありながら、前人未踏の学問的業績を残した偉人、塙保己一を紹介したいと思います。

江戸時代の人、塙保己一は、盲目でありながら、『群書類従』という膨大な国文学・国史関係の史料集を編集し、刊行しました。

保己一は、七歳のときに病気で失明、十二歳で母と死別するという不幸にまわれず。

その後、江戸に出て当道座の兩富検校に入門し、按摩・鍼・音曲などの修業を始めました。しかし生来不器用でどれも全く上達せず、絶望して自殺しようとした。自殺する直前で助けられた保己一は、兩富検校に学問への想いを告げました。それに対して兩富検校は、「お前の好きな道に進むがよい。泥棒とバクチ以外なら何をやってもよい。今日から三年間、私がお前を養おう。ただし、三年たつてもいなくなったら、お前を郷里に帰すぞ」と言ってくれました。

この言葉に保己一は感激し、発奮しました。そして、何かひとつのことを成し遂げるためには、感情に支配されるようではだめだと考え、絶対に怒らないことを誓い、実行しました。

保己一は盲目でしたから、それをからかう心ない人たちがいました。しかし、彼



はからかわれても、おだやかな顔に笑みをたたえて心を動かしませんでした。

雨富検校のおかげで、保己一はさまざまな学問を学ぶことができました。保己一は書を見ることができなかつたので、人が音読してくれたものを全て暗記し、それを心の中で考えていくというやり方で学問をすすめて行きました。

保己一の実力と才能が広く知られるようになりますと、水戸藩から『大日本史』編集の手伝いを依頼されるまでになりました。

その頃、保己一、三十四歳の頃です。古書の散逸を危惧し、学問の神様・菅原道真を祀る北野天満宮で『群書類従』の刊行を誓ったのです。

『群書類従』六百六十六冊が完成したのは、保己一が亡くなる二年前の七十四歳のときです。三十四歳で決心してから、なんと四十一年後のことです。

また、保己一は『群書類従』の編集のかたわら、四十八歳のときに、わが国の古典を研究する学校『和学講談所』を設立しています。

漢学を研究することが重んじられていた当時において、日本の学問を教える学校が設立されたのは、これが最初でした。保己一の日本文化の保存と研究に貢献した功績は、実に大きなものであります。

ここで『和学講談所』での逸話をひとつ紹介します。



## 朝のこない夜はない 213

保己一が『源氏物語』の講義をしているときに、風が吹いて、ろうそくの火が消えたことがありました。保己一はそれとは知らず講義を続けましたが、弟子たちが慌てたところ、保己一は「目あきというのは不自由なものじゃ」と冗談を言ったそうです。保己一の別の姿が見えて面白い話です。

保己一の不屈の物語は、後にアメリカのある母と娘に伝わり、彼女らを力づけました。その娘には、耳と目に重い障害がありましたが、彼女は、保己一を心の支えにして学問に励み、努力を続けました。

実はこの娘こそ、やがて奇跡の人と呼ばれ、世界中に勇氣と希望を与えた、あのヘレン・ケラーその人です。

最後にヘレン・ケラーの言葉です。

「本物の人格は、安楽と平穩からはつくられることはない。挑戦と失敗の苦しみの経験を通してのみ、精神は鍛えられ、夢は明確になり、希望が湧き、そして成功が手に入る。」

こうして初めて本物の人格ができあがるのだ」